

---

# いつかの指きり

桜華蒼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつかの指きり

### 【Nコード】

N8216D

### 【作者名】

桜華蒼

### 【あらすじ】

哀×コです。前に書いていたのを『1ポンドの福音』最終回記念に。アップしました（なんとなく）。雰囲気的には、最初の頃の二人の感じです。

いつからか分からないけれど、私は些細なことで苛立っている。前はこんなことなく、こんな気持ちを知らなくて不安になることもなかったのに。

例えば、そう今みたいなとき。

いつもより少し早く家を出た江戸川くんが、私を迎えにきて、それから登校中の蘭さんに会って二人が並んで歩く。昔は、江戸川くんに見知らぬ工藤新一の姿を重ねていたけれど、もうそんなことはない。二人は仲の良い姉弟みたいだ。

ほんの前まで、しめつけられるような痛みは蘭さんに向けていたのに、今は江戸川への方が強い。

彼がふと振り返った。どきん、と跳ねる心臓。

いつもなら。いつもなら

「なに暗い顔してんだよ」なんて揶揄するはず。しかし、意に反してただ、笑った。にっこりと。

「あ」

蘭さんが、角から来た園子さんの姿を見つけて江戸川くん、二三告げて走り去る。

彼は少し歩みを緩めて私に並ぶ。そして、手を取って握った。びっくりするほど自然に。

「……。緊張して汗かいてたら、ごめんな」

いつか、この仕草が当たり前になる日があるかもしれない。それを想像して、何だか不意に泣きたくなる。

一週間前学校帰り。俺、わかったんだよ。と犯人がわかったときと同じ顔で江戸川くんは言った。

「灰原のためにいるんだよ」

意味をわかりかねて返せない私に彼は続ける。

「だって、ここにいるの、おめーのおかげだから。だから江戸コナンなんだって。んでさ、俺灰原のこと好きだ」

さらりと言われて、驚くことさえできずに。

未だに自分の気持ちを伝えることができないままで。

嬉しくないはずはない。私は、自分でも気付かないくらいに彼に恋をしていた。好きになつてほしい、と。蘭さんを想うような思いを私に抱いてほしいと。なのにどうしてか、怖くてたまらない。

元に戻りたいと思っていないの？

工藤新一が消えてしまっても、いいの？

本当は、解毒剤できてるの……よ。

言えない、聞けない数々の言葉が脳裏を巡って呼吸さえ苦しくなる。

「今日はおめーがちゃんと眠れるように、念を込めてやつから」  
ぎゅっと握られる手。

こんなにおもってくれてるのに、なんで私は信じれないんだろ。

振りほどきなくなる。

「んな顔すんなよ」

声音があまりにも優しく、足を止めた。

「黙ってて悪いと思つてたから言うけど、俺知つてつから」  
「？」

「解毒剤できてるってこと」

あまりのことに、思わず乱暴に手を振りほどく。

どうして？ と、疑問を口にするより早く江戸川くんは  
「今日は学校さぼるか？」と静かに言い私も首を縦に振った。

ランドセルを駅のロッカーに預けて、きた電車に乗った。行き先は知らない。

「海にでも行かねえ？ 俺、そんな気分」

四人掛けの席に向かい合つて窓の外を見る彼を見つめる。

「許してやれよ」

ぽつりと。

「自分　宮野志保のこと。灰原哀として生きたっておめーの母さんは哀しまないさ。親ってのは子供の幸せを願うもんだろ？」

「あなたは……」

「名前が変わったって、もう誰も呼んでくれなくても。ちゃんとおめーは、宮野志保だよ」

「いいの？」

「灰原の髪、お母さん譲りなんだよな」

日に照らされるとお日さまみたいな色だよ。そう言って頭を撫でられた。

言葉がのどをついた。

「……ずっとずっとすきだったの」

お日さまみたいなあなたのことが。

「好きって言ってくれて嬉しかった」

ぽ、と浮かんだ涙が私の頬に伝った。

「やっぱさ、怖いよな。なくすかもと思うと不安になる。だってさ、ずっと。なんて信じれないだろ？」

そう。好きになった分だけ、対象がいなくなったときのことを考えてしまう。両親や姉のように。温かいものが突然なくなる痛みにきつと今の私は耐えきれない。

「できるなら、灰原に『ずっと』を証明してーと思う。けど無理だから、先のことはわかんねー。でも、だから俺は希望を持ってるんだ」

「希望？」

「決めてるんだ。俺、灰原と大人になろうって。それが俺の希望」

彼の未来には私がいるのだ、当たり前。

彼の言葉は、いつも私の心に光をくれる。

「……おめーの未来に俺はいるか？」

想像してみる、私の10年後を。

江戸川くんが私を自転車の後ろに乗せて走る夕暮れ。

私は今より上手に笑っている。

私を笑顔にできるのはあなただけだから。

「きつとね」

約束の言葉のかわりに初めてした指きりを私は忘れない。

もし、あなたが、10年後ここにいなくても。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8216d/>

---

いつかの指きり

2011年1月5日02時08分発行